

令和7年度 学力向上のための重点プラン【中学校】 新宿区立新宿中学校

■ 学校の共通目標

【HP公開用・様式1・7年5月15日】

授業作り	重 点	話し合い活動を生かしながら基礎的な知識・技能の習熟を図る。
環境作り		発表の機会などを設定し、ICT機器の活用を行うことで、生徒の理解を深める。

■ 各教科の取組について

教科	学習状況の分析 (各種調査から)	学校が取り組む目標 (日常の授業の様子などから)	目標達成のための取組
国語	・全学年において、漢字や文法などの基礎的な知識・技能の習熟に課題が残る。 ・2学年では「話すこと・聞くこと」「書くこと」に対する苦手意識が特に強い。(新宿区学力定着度調査結果より) ・3学年では「話すこと・聞くこと」に対する苦手意識が特に強い。(新宿区学力定着度調査結果より)	・漢字や語彙、文法事項の習得に力を入れる。 ・意見発表や話し合い活動、作文などとおして、伝え合う力の育成を図る。	①漢字や文法ドリルを活用しつつ、定期的に小テストを実施する。 ②ICT 機器を活用した「話すこと」「書くこと」の言語活動を多く設定する。
数学	・全学年に共通して中間層が比較的薄く、学力の二極化があると考えられる。 ・基礎計算や用語の定着に課題がある生徒や一人では課題が進められない生徒が複数在籍している。	・学力に課題がある層に対しては、基礎学力を定着させるために、計算の演習に繰り返し取り組む。 ・応用力が欠けているため、身に付けた知識を基に、深く考える学習に取り組む。また、自らの考えを深めていくために、教え合い学習に積極的に取り組む。	①デジタルドリルの活用。 ②單元ごとに小テストを行う。 ③テスト後に解き直しを行う。 ④小グループでの活動を増やすことで、発言の機会を増やす。
理科	・昨年度は基礎・基本の徹底により、新宿区学力定着度調査では、区平均よりも2、3年生ともに高い成績が見られていた。 ・2学年において、理科を苦手とする生徒の割合が比較的高い。 ・3学年において、理科を得意とする割合が、昨年度大きく増加した。	・全学年とも年間を通じて、基礎・基本の定着と、習熟の程度に応じた指導を継続する。 ・2学年において、日本語の読み書きが難しい生徒への日本語指導との連携を行う。また、苦手な生徒への学習のフォローを行い、少しずつ理解度を上げていく。 ・3学年において、さらに理科の力を育むため、応用問題に取り組む時間を増やす。	①デジタルドリルの活用 ②單元ごとに問題演習や小テストを行う。 ③実験の授業時、考察を文章で適切に表現させることを重点的に行う。 ④図や表を読み取る際に、その読み取り方を繰り返し説明し、必要な生徒には語句の練習を補習しながら、定着を図る。

社会	・ 2 学年において、新宿区学力定着度調査では、区平均より基礎的な分野が少し高かった。一方、応用的分野では区平均より低かった。また、学力の定着が不十分な生徒の割合も多くなっている。 ・ 3 学年において、新宿区学力定着度調査では、区平均より応用的分野が低かった。また、一昨年よりも学力の定着が不十分な生徒の割合が増加している。	・ 基礎・基本の定着を続けるとともに、複数の資料の読み取りや記述問題などの、応用的な学力の定着・向上を見据えた指導を行う。 ・ 学習の苦手な生徒や学力の定着が不十分な生徒に対して、習熟度に応じた指導を行い、理解度を上げられるようにしていく。	①デジタルドリルの活用 ②データや地図の読み取り方、記述問題への取り組み方を、丁寧に説明する。 ③単元ごとに小テストをおこなう。 ④習熟度に合わせたヒントや課題を設定しながら、授業や課題の作成をおこなう。
英語	・ 2 学年において、新宿区学力定着度調査では、「読むこと」と「書くこと」に対する力が弱いことが分かった。 ・ 3 学年においても、新宿区学力定着度調査では、「読むこと」と「書くこと」に対する力が弱い。 ・ 家庭学習については、取り組みにおける個人差が大きいという課題が見られる。	・ 学力に課題がある層の底上げと習熟の程度に応じた指導を行う。 ・ 学習の習慣化や家庭学習など、各生徒が適した学習に取り組むことができるようにする。 ・ 英語の知識や技能を、意味・形式・機能 3 つの側面で定着させ、思考力・判断力・表現力につなげていく。	①家庭学習を細かに指示し、定期的に取り組みを確認することでの習慣化 ②スプリングコンテストやレポートの提出 ③デジタルドリルの活用 ④基礎基本の確認となるような帯学習の実施 ⑤定期的にパフォーマンステスト（スピーチ、スキット等）を実施 ⑥ALT との TT や少人数授業を効果的に活用